

## &lt; 汝脳裏に刻め &gt;

11 月 13 日(金)

一昨年秋。「流離い」の後、中津川～馬籠～妻籠～木曾福島～奈良井を経た中仙道の旅最終日、塩尻の手前 10km、本山宿でのことだった。

「こんにちは、今朝は寒かったですね」と、公民館前に集う年配の方々に声をかけると「にいちちゃん、こんくらいで驚いちゃいけんズラ！」とズラ返しをされた。「やったあ！殿馬《野球マンガ『ドカベン』のキャラクター》がおったぞ」と、私はほくそ笑んだ。長野県では、この響きを耳にしたかったのである。

2km ほど進んで、めん食い処「宗月」を見つける。本場の信州蕎麦が食べたかった。満員で二軒に振られた、三軒目の店だった。

暖簾をくぐって中に入ったら、ここも満杯。「こら、あかん」と出かかった時、「今、空きますから」と女将さんが呼び止めてくれた。外には、行列ができかかっていた。

やれやれと案内された席へつく。周りを見ると、全員大ザルを食べていた。7,8 歳の子供までがだ。旨そうに啜り上げているではないか。「負けられんぞ」と、見栄張って大ザル 2 枚を注文した。

出て来たのは、蕎麦色の薄い(白っぽい)細麺だった。初めは、何もつけずにいただく。新蕎麦の香りと甘みが口中で広がり、スルスルとのどを越していった。次は塩。シコシコと、軽やかな歯ごたえだ。これで、一枚が無くなった。

最後はタレである。タレは、甘ったらしさのないアッサリ味。先ほどの子供が、美味しそうに食べている訳が解った。私も、ササっと啜り込む。瞬く間に、大ザル 2 枚は胃の中に消えていった。後には、爽やかさだけが残った。魔法の様な蕎麦だった。

5km 程行って、桔梗が原にあるリンゴ園にも立ち寄った。自宅にリンゴを送ってもらう手はずをした直後、「今日中に送るズラ」と、おばちゃん殿馬だ。

時刻はまだ 13:30 だが、毎朝の低温(マイナス 1～3℃)のせいで、足の指が霜焼けだらけで限界だ。ここ塩尻で止めることにしたから、時間はたっぷりある。イスに腰を下ろし、1 時間ばかり話をした。「ズラ」は中信地区ではよく使われている、とのことだった。

別れ際に、「にいちちゃん、これ持ってけや」と、傷もののリンゴを 7 個も袋に入れてくれた。「おばちゃんありがと。ほんなら行くズラ」と言っ、私はズラかった。

ずっと園が続き、リンゴがたわわに歩道にはみ出している。その中で、もらった内の一つを齧りながら歩いた。車中の人から、「あいつ、リンゴ泥棒や」と思われたかも知らん。

では、本題に入ろう。

今秋、諸事情でジャーニーの日程が 4 日しか取れなくなった。ナガオカ氏とのコリンズ四国旅も考えたが、先に、名古屋から日本海へ一本通しておきたいと変更した。塩尻～松本～

長野～上越(直江津)のラインである。

佐伯発 7:05「ソニック」、小倉で「のぞみ」、名古屋で「ワイドビュー信濃」と繋ぎ、15:00に塩尻に帰って来た。

初日は、松本まで15km走る。17:00前に東横にチェックインし、ルーティーンをこなした。手際が熟達してきている。乾燥機に¥200-を入れ、60分間回した。食事時間は1時間だ。翌朝が早いので、ダラダラ飲む訳にはいかない。

店は、「そばきりみよ田」と決めておいた。ホテルから石を投げれば届く距離にある。塩尻の、あの「宗月」で食べた蕎麦が忘れられない。松本でもう一度、と思ったのだ。

生ビールをピッチャーで頼み、料理は¥2100-のお任せコースにした。今日は適度の汗かきだったので、かなり入るだろう。

前菜の小鉢2つ、シャモジにのせた焼き味噌、馬刺し、ざる蕎麦、茶碗蒸し、きのこの鍋、と料理は申し分ない。

2つの小鉢を一杯目のビールで片付け、馬刺しに移る。熊本のよりも桜色が強い。部位はロースだとのことで、ネットリしていて口の中で溶けた。「長野の方が旨いじゃん」と呟きながらビールのピッチが上げまくった。

待望の蕎麦に行ってみよう。一啜りして、「アレ？」だった。隣の方に尋ねると、『宗月』は別格ですよ。場所もちがいますしね」と応えて頂いた。そうか、「所変われば品変わる。時が違えば味変わる」だよなあ。一発で納得だった。他所のとは、比べ物にならない程の美味しさなんだが。

ビールがなくなったので、日本酒を試す。松本市大信州酒造「大信州極寒辛口」だ。聞いただけで、脳天に稲妻が走った。

九州の地を抜けて、四国、中国、近畿を旅するにつれ、私の日本酒嗜好は開花したようだ。ビールの後は必ず日本酒にする(焼酎はたいしたもの置いてない)のだが、最近、微妙な味の違いが分りかけて来た。ただ、私の語彙力では到底言い表せないところがある。「旨い」と言ってしまうとそれでもいいかもしれないが、キッチリと言葉で伝えたい。もっともっと勉強しなければ、と思う。

「大信州」は北アルプスの地酒だけに、キリッとひきしまり、天に向かって一本線が貫いている様な感覚だった。そういえば、熊野や新宮で試した「太平洋」は円やかで、大洋の拡がりを感じられた酒だったな。

酒肴に、馬刺しと馬のモツ煮込みを追加する。これがまた、「大信州」にぴったりと合うんだわ。酒良し、肴良し、一日目の夜、松本は言うこと無しだった。

二日目、4:30に出発。長野市まで80km超の旅だ。内地、しかも山岳地での80km越えは経験がない。行き着けるのだろうか。

松本城のそばを通り、直に国道19号に出た。明科の木戸三差路まで、20km足らずの道のりだ。篠ノ井線が沿っている。早朝に始発電車に出くわすと、目も体も醒め、力が湧く。「おーい、今日もしっかりやれよ」と、見送られている気持ちになれるのだ。鉄道命!!

梓川から立ち上る川霧の中を進んでいると、上り一番列車がやって来た。6:00過ぎ、田沢駅付近だ。通勤や通学の人がちらほら見える。日々の営みに滞りはない。

20分程すると、今度は「ワイドビュー信濃」が向かってきた。長野発名古屋行きだ。

ワイドビュー系は、座席を一段高く窓を広くして、視界を良好にしている。シートもゆったりしていて、お気に入りの電車だ。

在来線の電車には数々乗っているが、一番はサンダーバード(北陸線、昔の雷鳥)、二番はワイドビュー系、三番はスーパー系(いなば、隠岐、まつかぜ等)だ。JR 四国の「しおかぜ」、「いしづち」、「しまんと」だって悪くない。「くろしお」(阪和線)や今の「にちりん」だって、「ソニック」に比べればまだましだ。

そう、「ソニック」が最悪なのである。座席が窮屈で、品つけカバーのある荷棚には、中荷物さえも入らない。新幹線から乗り継ぐと悲しくなる。大分で「にちりん」に乗り換えと、ホッするくらいひどいのだ。

ともあれ、「ワイドビュー信濃」の姿を見て、私は更に元気づいた。

電車は、私のジャーニーに華を添える、いわば、頼りがいのある「友」ではないだろうか。その友が、すれ違いざまに、「フーン」と汽笛を一発鳴らして行ったのである。これ以上の激励があろうか。淋しさが吹っ飛ぶ。手を振って「ありがとう」と大声で叫んだ。

夜が明け、人々が動き始める 7:00 頃、明科の木戸三差路に達した。迷わず右折し、403号に入る。ここから、千曲高原を下りるまでが山岳コースだ。どんだけの難敵なのか。

まず1番バッテリー、矢越峠登場だ。西条(西条)までの10kmの急坂だった。膝に手をつきつつ登る。あいにく、杖代わりに傘は持っておらず後悔した。降水確率が無くても、傘は携えなければならない。この1番には、いきなり右中間3塁打を打たれた感じだった。1回からピンチである。

2番バッテリーは華麗だった。西条から聖高原までの、10kmほどの細長い盆地。左右に1000m級の山が連なり、牧歌的な田園地帯だ。遠くには、初冠雪した山々が見える。方角からいって白馬連峰だろうか。別世界だ。こんな風景があったのか。心に刻もう。

しかし、ここは途中止まることなく聖高原駅まで我慢し、しぶとく打ち取った。

これから聖湖までを3番バッテリーとしよう。グリーンと勾配がきつくなった。7~8kmだが、これは敬遠の四球にする。走る意志0%だった。何回かのつづら折りを経て、標高1000mの聖湖へ辿り着く。疲労困憊にて、大水入りとした。

次は最強の4番バッテリー、千曲高原下りだ。幾重ものヘアピンカーブが待っているはずである。ワセリンを足裏に入念に塗り込み直し、準備を整えた。マメを作ることは、自らマウンドを降りることではない。一番恥かしいことだ。

戦々恐々として下りていく。ところが、私を迎えてくれたのは山吹色の絨毯だった。落葉松の落ち葉が道路一面を覆っている。フワリとした感触で、足裏が気持ち良い。それが、千曲ゴルフクラブを抜けるまで続いていた。心優しい4番ではないか。

カーブには全て番号が付けられて(C-50のように)おり、気づいた時には50番台だったから、恐らく、二桁後半から始まったのだろう。下りて行くにつれ、数字が小さくなっていった。下れども下れども180°のヘアピンが続いたが、勾配は緩くて、脚は止まらなかった。この4番は、得意のドロップで三振に仕留めたことにしよう。重戦車は、下りには強いことが証明された。

姥捨駅の真上にさしかかった。403号を最後まで下らず、ここから駅に降り、長楽寺経由で千曲川河畔に落ちることにした。5番バッテリーは手強いぞ。

松本～長野でこのコースを選んだのは、千曲高原も然ることながら、実は、姥捨駅が主目的だったのである。

豊肥線に、立野駅というスイッチバック式駅がある。ここも同じだ。長野方面から上ってきてバックで駅に入り、松本方面に向かう。特急や快速は素通りしてしまうが、普通列車や貨物列車でかなり賑わう。篠ノ井線は、15分間隔で電車が来るのだ。私が、駅傍の踏切を渡ろうとすると、貨物列車がスイッチバックして来て、5分程待たされた。長くて、ホームをはみ出してしまっていた。

姥捨駅の魅力はもう一つある。根室線の狩勝峠、肥薩線の矢岳越えと並んで、日本三大車窓の一つに挙げられているのだ。ホームから見下ろす長野盆地は、「絶景かな!!!」だった。これほどのパノラマは、日南海岸以来だろうか。脳裏に刻もう。

さてと、5番と対戦しよう。2アウト1、3塁だ。

踏切を渡ると、ほぼ絶壁だった。急斜面にへばり付いた家の間を、細い道がくねっている。よくぞこんな所に家を建てたな、と感嘆した。小さなリンゴ畑が点在し、大きなリンゴがぶら下がっていて、時々頭に当たる。それほど狭いのだ。

途中で工事中通行止めがあり、来た道に戻り、大回りをして落ちていった。落ちていくというのは、大げさだと思われるかも知れないが、これしか、的を射た表現を思いつかない。

平地に下りた時には、脚がガクガクで、しばらく動きたくない状態だった。レフト上段にホームランを叩きこまれてノックアウトだよ、これは。やられてしまった。

もう、その変にホテルがあれば飛び込みたい気分だった。残り、長野市街までの20kmをクテクテと3時間半もかけて歩き、17:00に東横にやっところさ着いた。しばらくは、チェックインの手続きもできない有様だった。

居酒屋も、目当ての所には行く気になれず、近くのありふれた店に寄った。ビールは、生大2杯を飲むのがやっと、料理も、最後に注文した山賊焼には一口手をつけただけで、残す始末だった。お店の人に申し訳なかった。「こんなことは初めてです」と言い訳はした。

これじゃ！ 旅になりませんぜ!! 重戦車じゃありやあせんぜ!!!

まっ、JRの宣伝にはなったと思うが……。

